

医療の架け橋を目指して

東京大学大学院生殖発達加齢医学専攻

徐 子焮

私は日本に来る前に、中国で医学部を卒業し、医師として働いていた。その時、産婦人科医として臨床で解決できない症例に直面して、私たちができることはこれほど少ないのかという疑問を抱いた。最も印象的だったのは20代の卵巣がん患者だ。彼女は大学在学中に卵巣がんにかかってしまった。従来の医療手段では彼女を救うことはできない。また、彼女の命を延ばす治療も難しく、しかも生殖能力も失ってしまう。もう一つの例は妊娠中に乳がんが検出された症例だ。すぐに治療を受けると、流産せざるをえない上に、治療を終えてもその後の妊娠は難しくなる。しかし、すぐに治療を受けなければ命に関わる可能性がある。中国社会では、子供は両親の絆の象徴と言われる。子供が生まれなければ、夫婦関係を持続できるのかと考える人もいる。臨床医としての経験を積むにつれて、こうした症例に多く直面しジレンマに陥って、研究の力を借りればこうした問題を解決できるかもしれないと考えようになった。私の人生において、研究を行わないことはあり得ないことだと思い日本にやってきた。

東京大学大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻に入学し、研究生活を始めた。私の研究テーマは、抗がん剤による卵巣毒性における細胞老化の役割である。具体的には、抗がん剤治療を受けることで生殖機能に与える影響や、その解決策を探す。例えば、まだ子供を持っていない30歳の女性が乳がんを発症した場合、抗がん剤治療は生殖機能に壊滅的な影響を与え、治療後に母親になることが難しくなる可能性がある。同時に、彼女は同世代の人よりも早く更年期を迎え、骨粗鬆症や脂質代謝異常などの健康問題にもより早く直面することになる。私たちの研究は、このような患者に薬を投与し、抗がん剤治療を受けながらも生殖細胞への影響をできる限り減少させ、生殖機能を保存することを目指している。既存の論文によると、抗がん剤治療を受けた乳がん患者の約70%が5年以内に早発卵巣機能不全（早めの更年期）を経験している。私たちの研究では、少なくとも10年から15年後に更年期を迎える可能性が高まることが期待される。この治療法は、すでに動物実験で効果が証明されているが、臨床試験に進むことで、より広範囲に適用されることが期待される。もう一つの例として、血液がんを患った5歳の女儿の場合、治癒の見込みがあり、少なくとも70歳まで生存する可能性があるが、現在の治療法では将来的に早発卵巣機能不全になる可能性が高い。このような場合、将来的に子供を持つ可能性があるため、彼女に選択肢を残す必要があると考える。現在の治療法としては、卵巣冷凍保存があるが、何度も手術を受ける必要があり、身体的および経済的な負担がかかる。私たちの研究で使用した薬は経口摂取可能であり、現在の治療法よりも負担が軽減されると期待される。私たちは、一日も早く研究の成果を実用化し、人々の健康と幸福に貢献したいと考えている。

東京大学での4年間の経験を通じて、科学的な研究における思考力が鍛えられ、問題に対して客観的に分析し、解決策を考え出す能力が身についた。これにより、今後の研究活動において有益な役割を果たすことができると確信している。私の指導教官は、研究は大学院でのみ行うものではなく、一生を通じて続けるべきだとよく述べていた。この言葉は、私の将来の研究生活をより意義深いものにしていくだろう。

現在、日本の医師免許取得に向けて努力し、将来的には日本でも産婦人科医として活躍したいと考えている。さらに、将来的には日本と中国の両方で産婦人科医として働き、両国の医療技術を習得し、患者にとって有益な治療法を提供できるようになりたいと思っている。同時に、臨床で解決できない問題に取り組む研究活動も続け、その成果を臨床現場に活かすことで、医療の進歩に貢献したいと考えている。このような活動を通じて、日本と中国の医療の架け橋となり、両国の医療水準の向上を目指していきたい。